

今年「ばか苗病」が多数発生

種子更新や稲刈り後の耕うん等の対策を実施！

■ばか苗病の発生・対策について

本年作では県内各地でばか苗病が発生し、君津地域でも例年にない程、ほ場での発生が見られました。ばか苗病は種子伝染しますので、種子更新を必ず実施し適切に種子消毒しましょう。

また、ばか苗病は、種子の指定伝染病害に指定されており、種子生産ほ場で発生すると種子として出荷できなくなります。今年、種子生産ほ場の周辺でばか苗病が発生したため、種子として出荷できなくなった事例が発生しました。千葉県内の種子生産ほ場の半分以上は君津地域に存在します。千葉県産種子の安定生産のためにも、周辺に種子生産ほ場がある生産者におかれましては、以下の通りばか苗病対策への御協力をお願いします。

周辺に、水稲種子生産ほ場がある生産者の皆さんへ

ばか苗病菌の胞子は少なくとも200m程度飛散し、翌年の種子となる開花期の籾に感染してしまうため、ばか苗病の発生は、水稲種子生産に影響を与えます。

優良種子の生産のため、ばか苗病対策に御協力をお願いします。

- (1) ばか苗病発生ほ場は耕うんし、稲株を土中に埋没して、菌密度を下げましょう。
- (2) ばか苗病の発生ほ場から収穫した籾や稲わら、その粉塵にはばか苗病菌が存在している可能性が高いため、浸種や催芽、は種をする作業場や機具機材を良く清掃し、ばか苗病菌の密度を下げ、感染リスクを下げましょう。
- (3) ばか苗病が発生してしまった苗を本田に移植するのは止めましょう。

—農業事務所より郵便で配信している方へお願い—

稲作情報の配信を郵便から、電子メールまたはFAXに切り替えを進めています。

電子メール・FAXをお使いの方は、下記までご連絡ください。

連絡先 青木 y.aok31@pref.chiba.lg.jp 0438-23-0299 (電話)

■ 稲刈り後の耕うんの実施

稲刈り後の耕うんは、土づくりの効果が期待できますので、ほ場が乾き次第速やかに耕うんを行いましょう。なお、再生株が大きい場合や収穫を断念したほ場では、ロータリーに稲わらが絡み付かないよう、事前に草刈り機等で刈っておきましょう。

本年作では一部のほ場で「ワキ（地中からのメタンガスや硫化水素）」による初期生育の遅れが見られました。稲わらのすき込み時期が遅くなると、翌年作において土壌中の酸素欠乏や「ワキ」による初期生育の遅れが発生するおそれがありますので、ほ場が乾き次第速やかに耕うんしましょう。なお、ほ場の状態により耕うんが遅くなった場合は、土壌表面に浅く混和するようにしましょう。

■ 土づくり実施

稲わらのすき込み等の土づくりは、地力を高め、収量の安定化や天候不良での収量減少を抑えます。

また、けい酸資材を 100～200kg/10a 程度施用すると、倒伏が軽減されるとともに、病害虫や土壌還元に伴う各種阻害物質に対して抵抗性を高められます。特に、老朽化水田や砂質土水田ではその施用効果が高くなります。

けい酸はかんがい水や稲わらからも供給されますが、水稻は1作で約 100kg/10a のけい酸を吸収しますので、適切に施用しましょう。

■ 難防除雑草の防除

オモダカ、クログワイ、コウキヤガラ等の主に塊茎から発生する難防除雑草は、発生が長期間にわたるため、移植後の除草剤だけでは防除しきれません。秋冬期の耕うん等の耕種的防除と薬剤防除を数年継続し、徐々に確実に塊茎を減らしていきましょう。

土壌が乾燥するほ場では秋冬期に数回耕うんすることで、塊茎を損傷や寒さで枯らすことも可能ですので、水稻を刈り取ったままにせず、耕深 15 cm 程度を目標に必ず耕うんしましょう。

■ イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカの対策）

近年、ヒメトビウンカが媒介するイネ縞葉枯病の発生が増加傾向にあります。イネ縞葉枯病が発病すると、生育不良や出すくみ症状、奇形穂など出穂異常となり、減収します。

本病に感染した収穫後の再生株は、葉に葉脈に沿った不明瞭な黄色い縞状の病斑や奇形穂などの病徴が現れ、ヒメトビウンカが発病株を吸汁すると、ウィルスを保毒しますので、水稻収穫後は早目に水田を耕うんし、稲株を土中に埋没します。また、ヒメトビウンカの越冬場所を減らすため、ほ場周辺の雑草（特にイネ科雑草）も除去しましょう。



再生株の病徴